

大田原市高山遺跡出土の縄文時代中期前葉の浅鉢形土器 —阿玉台式と大木式の文様の同一個体共存例—

つか もと もろ や
塚 本 師 也

はじめに

- 1 遺物の観察
- 2 年代的・系統的位置づけ

関東地方北東部において、異系統文様の同一個体共存例を探すと、茨城県北部には散見されるが、八溝山地を越えた西側の栃木県那須地方にはあまり見られない。そうしたなか、大田原市高山遺跡の浅鉢形土器は、阿玉台式の器形、口縁部区画文に大木式系土器(七郎内Ⅱ群土器)の地文と有節沈線を取り入れたものと考えられる。そこで、数少ない本例を図化・紹介する。

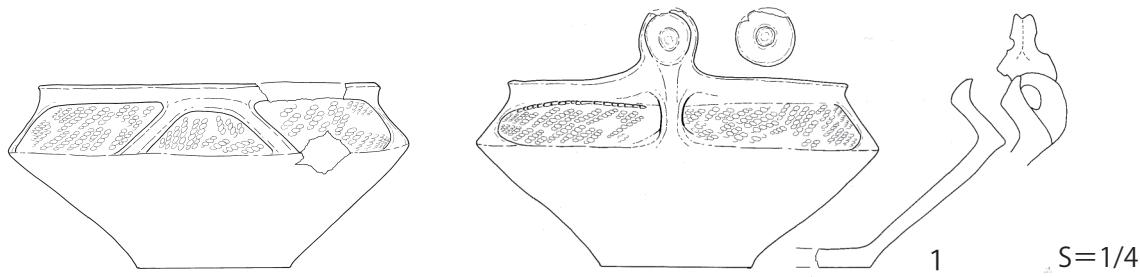
はじめに

2020（令和2）年9月6日、筆者は企画展準備中の大田原市なす風土記の丘資料館を訪れた。展示予定の縄文時代中期中葉の浄法寺類型の評価について、同館の上野修一館長と鈴木志野学芸員と議論するためである。両氏はこの企画展のために大田原市内の公民館等に保管されていた出土品の所在確認調査を行っており、なす風土記の丘資料館の収蔵庫にこれらの出土品が集められていた。その中に今回図化、紹介する浅鉢形土器が含まれていた。

この浅鉢形土器については、大田原市史に写真が掲載されており、阿玉台式の浅鉢形土器と認識していた。丁度この頃、筆者は11月29日に加曾利貝塚博物館で発表する縄文時代中期前・中葉の異系統文様同一個体共存例の集成、分析を行っていた。茨城県北部では、大木式系土器と阿玉台式土器の文様を同一個体に共存する好例をいくつか抽出していたが、八溝山地を越えた西側の栃木県那須地方では、異系統文様共存例をなかなか見出すことができなかった。本例に接し、単なる阿玉台式の浅鉢形土器ではなく、縄文や有節沈線など大木式系土器（七郎内Ⅱ群土器）の要素がみられ、異系統文様の同一個体共存例であると認識した。そこで、後日改めて実測させていただく許可を得、2021（令和3）年1月20日に実測をした次第である。

1 遺物の観察（第1図）

全体が算盤玉状を呈す浅鉢形土器である。口径17.0cm、最大径20.5cm、底径8.0cmで、器高は平縁の部分が10.0cm、突起上端で13.5cmである。中央が窪む円盤を表裏に配した突起1個を平坦な口縁に付ける。屈折部より上の内傾した部分には、やや幅広の低い隆帯によって区画文を配している。区画文は、突起直下の左右に橢円形の区画、その裏側には、半円状の区画とその両脇の隅丸平行四辺形の区画の計5個である。なお、突起直下の区画の境は橋状の突起となっている。区画内には、いずれも2段RLの縦位施文による単節斜縄文を施している。屈折部より下は無文である。突起直下の、向かって左側の橢円形区画の上側に沿って1条の細い有節沈線文を施している。胎土には砂粒および雲母の微細破片を含み、色調は褐色、暗褐色を呈す。底面中央には焼成後に穿たれた孔がみられる。



第1図 高山遺跡出土縄文時代中期前葉の浅鉢形土器

2 年代的・系統的位置づけ

阿玉台式の浅鉢形土器は、無文で底部から口縁に向かって直線的に開くものと、口縁部に深鉢形土器と同様の区画文を配するものがある。区画文を配す浅鉢は、胴部から緩やかに内湾する口縁部に移行するものと、屈折して口縁部が内傾するものもある。本例はそのような器形の事例である。

阿玉台式土器は、阿玉台Ⅲ式新段階以降地文に縄文を施すようになる。それ以前は、原則として地文の縄文がない。阿玉台Ⅲ式以降でも、浅鉢形土器で縄文を施文する例は少ない。

細い竹管による押引きで有節沈線を施している。

本例にみられる区内縄文施文と有節沈線は、大木式系土器のうちの七郎内Ⅱ群土器の手法と考えられる。

阿玉台式土器は、隆帯に沿う押引文等の種類により細別されている（西村 1972・1984）。本例に近い單列の角押文を施す土器は阿玉台Ⅰb式である。しかし、本例の縄文と有節沈線が七郎内Ⅱ群土器のものとすると、七郎内Ⅱ群土器が盛行する阿玉台Ⅲ式期となる。阿玉台Ⅰb式期は原則縄文を施さないため、本例は七郎内Ⅱ群の盛行する阿玉台Ⅲ式期と考えたい。すなわち、阿玉台式の器形に七郎内Ⅱ群土器の地文縄文と有節沈線を取り入れた異系統文様同一個体共存例と考えられる。

謝辞

筆者の急な申し出に対し、快く実測図作成と公表の機会を与えて下さった上野修一、鈴木志野両氏に感謝の意を表する次第である。

【参考文献】

西村正衛 1972 「阿玉台式土器編年の研究の概要—利根川下流域を中心として—」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第18輯

西村正衛 1984 「19. 阿玉台式土器の編年」『石器時代における利根川下流域の研究—貝塚を中心として—』早稲田大学出版部